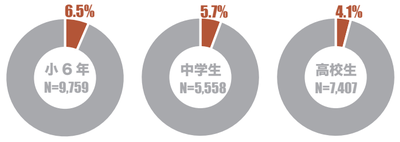
# ヤングケアラーの住まう学び舎
## - 幼き介護者に対する建築的支援の可能性 -

近年家族にケアを要する人がいるために家事や家族の世話などを行うヤングケアラーという子供の存在が明らかになってきた。ヤングケアラーは家事や世話を日常的に強いられ、そのケアの重さから遅刻、早退、宿題をする時間が取れないなど学生としての生活を失っている。また、ケアに休みなどなく、ヤングケアラーは放課後の学生同士のふるまいや休日の学外での交流する機会を失い、孤立化してしまっている。そこでここではヤングケアラーという幼き介護者に対して建築という立場から支援できる可能性を提案すると同時にヤングケアラーという存在を多くの人に認知してもらうことを目標とする。

障害や病気のある家族に代わり家事をする / 家族に代わり幼いきょうだいの世話をする / 障害や病気のあるきょうだいの世話や見守りをしている / 目の離せない家族の見守りなどの気づかいをしている / 言語の違いや障害のある家族の通訳をしている / 家計を支えるために労働をして助けている / アルコール・ギャンブル問題を抱える家族に対応している / 慢性的な病気の家族の看病をしている / 障害や病気のある家族の身の回りの世話をしている / 入浴やトイレの介助をしている

# 1 ヤングケアラーの実態調査

## 1 ヤングケアラーの現状




15人に1人　17人に1人　24人に1人

小学生の高学年から中学校にかけて15〜17人に1人の子供がヤングケアラーである。（1クラスに2人の割合）また、そのうちの約半分の割合のヤングケアラーはケアを毎日行なっており、日常的に家族のケアをしている。

日頃の悩みを相談した経験

| | 中学2年生 | 全日制高校2年生 | 定時制高校2年生 |
|---|---|---|---|
| ない | 82.5% | 79.3% | 37.5% |

その理由のほとんど

相談するほどではない、相談したくない、そもそも介護している自覚がない

ヤングケアラーは相談するほどではない、相談したくない、そもそも介護している自覚がないといった理由から自身が置かれている状況を他者に認知されることがない。それにより、ヤングケアラーは助けを求める機会をなくし、他者に家庭の事情が気づかれることなく「学生」としての生活が自然と失われてしまっている。

## 2 ヤングケアラーの温床

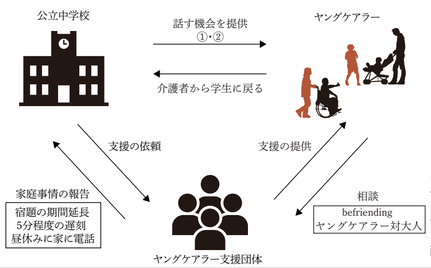
ヤングケアラーの家族構成

| | 南魚沼市（対象回答65） | 藤沢市（対象回答508） |
|---|---|---|
| ひとり親の子供 | 21 | 228 |
| ひとり親の子供と祖父母 | 11 | 28 |
| ふたり親の子供 | 18 | 178 |
| ふたり親の子供と祖父母 | 6 | 14 |
| 祖父母と子供のみ | 1 | 3 |
| その他 | 4 | 25 |
| 不明 | 4 | 22 |

調査が先進している二つの地域の結果を見てみるとどちらもひとり親世帯に回答が多く集まっていることからヤングケアラーはひとり親の世帯に起こりやすいことがわかった。

# 2 建築的支援の模索

## 1 ヤングケアラー先進国イギリスでの取り組み




①ヤングケアラーミーティング

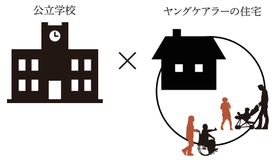
昼休みを使って家庭の現状報告をする

②ヤングケアラーグループセッション

選択科目として授業に組み込まれている

イギリスはヤングケアラーと公立学校の仲介に支援団体を設置し、ヤングケアラーの家庭での生活と学校の生活の連携を測ることによって支援を強化してきた。それは学校側が積極的にヤングケアラーに関わることでSOSの早期発見や失われたコミュニティ作りに貢献している。
つまり、ヤングケアラーの生活と学校での生活をともに考えることでヤングケアラーにとってケアという家庭での生活と勉強という学校での生活の両立ができるのではないかと考える。

## 2 公立学校と住宅



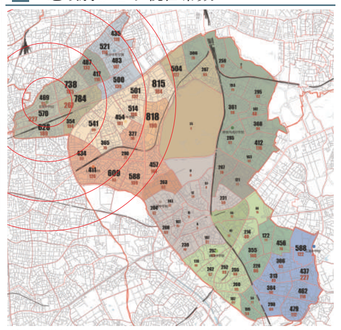

公立学校とヤングケアラーの住宅を一体で考え、学校と近接したヤングケアラーの住まいを提案する。それによってこれまで家事によって失われていた学校生活が日常化する。またヤングケアラーが一緒に住むことはこれまでひとりで抱えていたケアの悩みや家事を共有する機会を与え、ヤングケアラーやその家族のコミュニティを築く場になることが期待できる。

# 3 ヤングケアラーとその家族の住まい × 中学校

## 1 敷地

渋谷区にある笹塚中学校を敷地とする。住宅街であるこの地域は中学校が学生の活動を内包する拠点となっている。

## 2 地域別ひとり親世帯数



笹塚中学校の周辺の学区はひとり親世帯の数が多く、ヤングケアラーが多く潜んでいるエリアとして考えられる。

## 3 教育現場の現状

| 生徒数 | |
|---|---|
| 2011年 | 2021年 |
| 330人 | ↘ 167人 |

| 学級数 | |
|---|---|
| 2011年 | 2021年 |
| 9クラス | ↘ 6クラス |

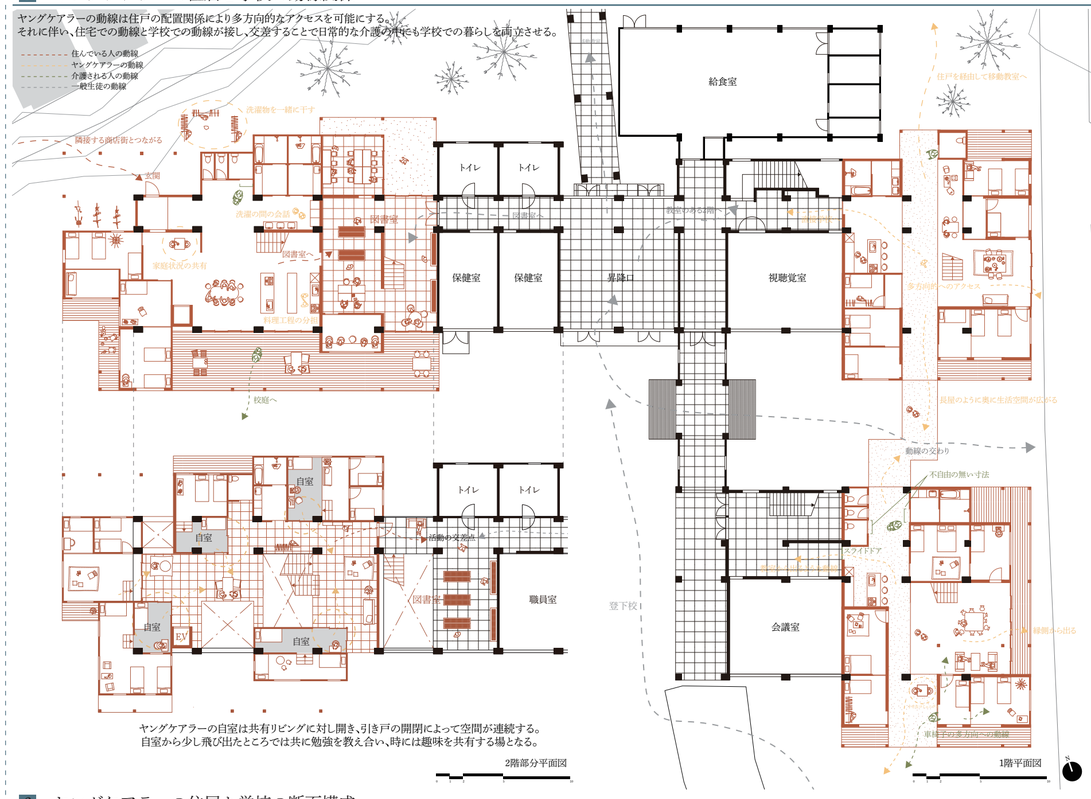
生徒数・学級数の減少に伴い、現在使われていない空き教室は５つあり今後も空き教室は増えていくことが予想される。そこで渋谷における空き教室の余剰空間を利用しながらヤングケアラーのための集合住宅を増築していく。

## 4 既存校舎の減築と増築

現在の空き教室を中心に壁やスラブを解体していきヤングケアラーとその家族のシェアスペースを作っていく。そのシェアスペースを生活の核とし、その周囲にヤングケアラーとその家族の住まいを増築する。

## 5 ヤングケアラーの住居と学校の動線関係

ヤングケアラーの動線は住戸の配置関係により多方向的なアクセスを可能にする。
それに伴い、住宅での動線と学校での動線が接し、交差することで日常的な介護の傍でも学校での暮らしを両立させる。



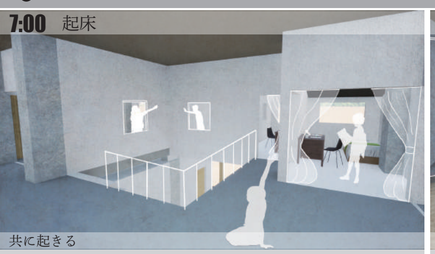

ヤングケアラーの自室は共有リビングに対し開き、引き戸の開閉によって空間が連続する。
自室から少し飛び出たところでは共に勉強を教え合い、時には趣味を共有する場となる。

## 6 ヤングケアラーの住居と学校の断面構成

これまで認知されることのなかったヤングケアラーという存在はここでは互いに見られ開かれる体験を享受し、日常的に追われている家事や介護により非日常化していた勉強が「集まって住む」そして「学校と接続」することにより、1人の学生として社会に参画する手助けを実現させる。

# 4 ヤングケアラーの住まう学び舎での日常

**7:00 起床**



共に起きる

ヤングケアラーは夜遅くまで家事に追われ、朝は時間通りに起きるのが苦手な人が多い。ヤングケアラーの自室が共有スペースに開くことでお互いに起こし合えることができる。

**7:10 朝食**

朝の家事

朝は時間がないなかで朝食作りや洗濯など家事に追われることが原因でヤングケアラーは遅刻をよくしてしまう。集まって住むことは家事を分担でき、朝に時間を作れる。

**8:00 朝の支度**

同じ空間で過ごす

各住戸はプライベートを確保できるだけの空間とし、普段は住戸間の共有リビングで過ごす。これまで知られていなかったヤングケアラーとケアされる人は存在を認知される。

**8:30 登校**

一つドアの先へ

介護により感覚的に距離が離れていたヤングケアラーと学校は物理的に距離を近づけることで非日常的だった学校での生活が日常へと取り込まれる。

**10:00 移動教室**

教室間の移動の合間に

ヤングケアラーは学校にいる間、家の様子を確認するために一時帰宅したり電話をしたりしていた。ここでは学校での動線が住宅の中へと貫通し、定期的に様子を伺える。

**11:00 休み時間**

学校と住宅の中間領域

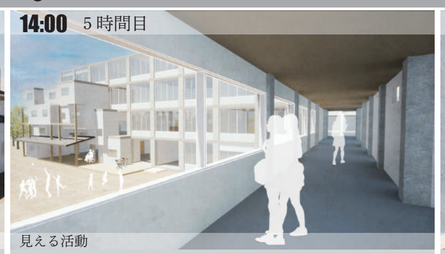
もともと学校にあった図書館を学校と住宅の間に置いてその両方に対しても開き、学校と住宅との関係が衝突するのではなくコミュニティコアとして活動が接していく。

**12:30 昼休み**

垣間見える学校での賑わい

ケアされる人はヤングケアラーが学校にいる間、静かな家で過ごしている。休み時間や体育に聞こえる声はケアされる人にとって賑わいが感じられ、孤独感を和らげる。

**14:00 ５時間目**



見える活動

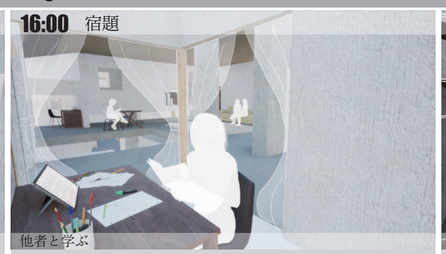
内側にある校庭へと求心性を持った既存の中学校に対して住宅を増築していくことで視線が自然と集まり、廊下から住宅の共有部の様子が確認できる。

**15:00 帰宅**

１日の出来事の共有

これまで学校が終われば帰宅をしなければならなかったヤングケアラーに放課後という概念が生まれ、趣味の話や学校での出来事を話す、生徒同士の団欒ができる。

**16:00 宿題**



他者と学ぶ

介護により塾に通うことを諦めたヤングケアラーは学校が唯一の学ぶ場所である。他者と学んだ内容を確認し、教え合いながら学問を定着させていく環境を作る。

**17:00 交流**

ヤングケアラーとケアされる人

ヤングケアラーとケアされる人は他の家族に比べ感情がセンシティブになりやすい。縁側や室内の土間を利用しながら気持ちの安らぐ場所を点在させていく。

**20:00 自由時間**

ケアラーウィンドウ

ヤングケアラーは常にケアする人に対して注意を払う必要がある。ケアラーウィンドウはヤングケアラーとケアされる人にとって自分の時間を過ごす上で安心材料となる。